

特別支援教育コース

科目名：代替コミュニケーション論

担当教員：苅田知則

登録学生数：24名

障害支援技術を用いた特別支援教育に関する専門的知識・技能の習得を目指した授業の試み

特別支援教育・苅田知則

1. 授業の概要・目標

肢体不自由児者をはじめ、多くの障害児者は、学習・移動等の困難だけでなく、コミュニケーション上の問題を持っている。コミュニケーションがうまくとれないということは、当事者のQOLが低下したり、自己効力感が低下したりする可能性がある。ゆえに、特別支援教育の現場においては、障害当事者の「話したい」というコミュニケーション欲を充足させることが重要である。本授業では、代替コミュニケーション(AAC)や支援機器(AT)を用いることで、肢体不自由児が他者とコミュニケーションをとることができる支援法を学ぶ。

本授業の目的は、(1)障害疑似体験を通して、肢体不自由をはじめとした障害児者の困難を共感的に理解する態度を身につける、(2)障害児者のコミュニケーションを支援する AAC や AT の基本的知識について説明できる、(3)障害特性・ニーズに合わせた AAC, AT の使用方法を説明できる、(4)当事者の生活にあわせたインタフェースを考案することができる、であった。

2. 講義の進め方と内容

本授業は、以下の通り行った。なお、指定テキストを用いた小テストを毎回行い、学生の授業外学習を促した。

第1回：ガイダンス、AAC・ATとは？

第2回：AAC・ATの種類

第3回：発声発語器官の解剖・生理

第4回：発声発語器官の発達

第5回：0～2歳の言語理解の発達

第6回：3～5歳の言語理解の発達

第7～8回：肢体不自由児者の疑似体験(コミュニケーション)

第9回：肢体不自由児者のコミュニケーション、生活を支援する AAC・AT

第10～11回：ICTを活用した AAC・ATの実習(アクセシビリティ機能の実習)

第12回：重複障害と AAC・ATの指導(訪問カレッジ含む)

第13～14回：特別支援学校等における AAC 活用の実践例(ゲストスピーカーによる事例紹介)

第15回：最終試験、及び総括

3. 省察

2022年度は対面型授業として実施したが、諸事情により対面型授業に出席できない受講生もいたことから、Moodle3.5のコースに授業で用いたスライド資料及び動画コンテンツを提示し、遠隔非同期型での受講も可とした。

第7～8回には、透明文字盤や紙媒体の五十音表(コミュニケーションボード)を用いた肢体不自由(全身性運動障害)児者の疑似体験を行った。受講生は、随意的に動かすことができる身体部位を限定され、その身体部位を動かすことで「Yes」の意思を表出できると指示された。小グループのメンバーが透明文字盤やコミュニケーションボードを用いて意思確認を行ったが、受講者等は短い内容でも伝達に時間がかかり、身体的負荷も高いことを実感していた。

第10～11回においては、GIGAスクール構想によって児童生徒1人1台端末として配備されたタブレット端末の教育現場での活用を想定し、各OSに標準搭載されているアクセシビリティ機能に関する実習を行った。受講生は、各障害種別に対応するアクセシビリティ機能を実際に起動し、設定を調整する中で、実践現場で円滑に合理的配慮を提供ができる技能について学んだ。あわせて、教育現場で活用が進む音声教材等の教科用特定図書(障害がある児童生徒に配布されるバリアフリー教科書)や、ICT機器を用いた訪問教育(学校卒業後の訪問型生涯学習:訪問カレッジ等を含む)についても学んだ。

また、第13～14回には、特別支援学校等における AAC 活用の実践例(ゲストスピーカーによる事例紹介)として、長年、福岡市立特別支援学校において肢体不自由・重症心身障害児への指導に携わっておられた福島勇氏(現 熊本高等専門学校特命客員教授)に、遠隔同期型授業を依頼した。特別支援学校での AAC・ATの活用事例、及び活用のための工夫・フィッティングを多数紹介された。全ての受講生から、「授業で学んだことが実践と結びついた」等、肯定的な感想が得られた。